

Yokohama National University Diploma 2020



藤原 ディプロマの吉原賞の評価を始めたいと思います。最初に確認ですが、1位から5位までを決めるということですね。1位を横浜国大の卒業設計最高賞として吉原賞に推薦するという形になります。皆さんの2票ずつ入れていただいたものが今表になっていますが、自分が入れたものと相違がないかどうかを確認していただけたらと思います。現在14人に吉原賞の票がばらついて入っているという状況です。その中で票が集まっているのが河野さんの10票と、榊原さんの9票ですね。まずは票の少ないところから確認していきたいと思いますが、まず、石川くんと正林くん、馬場くん、それから阿部さんが1票入っています。簡単に、表を入れた先生のコメントを頂ければと思うのですが、妹島さん、石川くんに票を入れていますね。

妹島 力作はもっと色々あったと思ったのですが、一つは運動の建築というのが、やっぱり色々地形を扱った人、特に谷戸とか横浜を扱った人も多いので斜面地はいろんな形で出てきたんですけども、こういう感じで考えて、接し方というか地形に対してのあたり方、離れたりくっ

ついたりとかスケールとかというので1番、見た瞬間にその高低差を動く瞬間に魅力的なものが出来上がっているなと思って入れました。

藤原 ありがとうございます。次に正林くんに票を入れた、大野先生。

大野 私はいつも考え方とプレゼンテーションと図面と模型の4項目で考えているのですが、今回皆さんそれぞれかなり良かったと思うのですが、正林さんの発表だけはなんか嬉々としているというか非常に楽しんで、辛かったとは思うのですが、いろいろ楽しくプレゼンを話しているという感じと、そういったところが模型にさらに、人がいる模型なんてのは非常に面白い。その寝屋の生活をよく示していたりするという点。イラストが非常に面白い。図面を誤魔化しているといえそうなのだけど、上手にイラストでカバーしていたりして、全体的に非常に良かったということで1票入れさせていただきました。

藤原 ありがとうございます。次、馬場くんに

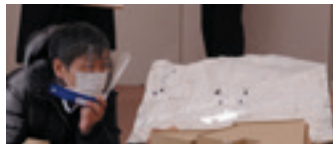
入れている高見沢先生。

高見沢 馬場くんの江の島ですけど、全体的にスッキリと書かれていて、とてもいいなと思いました。あとは、江の島のような古いものもあり、新しいものもあり、オリンピック絡みもありということで、それが更新されていくということは江の島という一つの島のみならず、日本にとっての財産として、優れた提案かなというふうに思って投票しました。

藤原 ありがとうございます。次、阿部さんに入れた霜田先生。

霜田 はい。阿部さんのやつはですね、一つドーンと建築を作るというかは、既存の街の中に隠れている余剰地や擁壁なんかに着目してですね、それに少しだけ加えることによって、一気に人の歩ける道になっていくということ。提案のわかりやすさがあり、鋭さっていうものが個人的には共感したので票を入れました。

藤原 ありがとうございます。今の1票だと順



位としては11位ということになるので、5位までのセレクションの中の議論には入れた方がいいのか、外した方がいいのかということという外すのが順当かなと思うのですが、よろしいでしょうか。たしかに今年は中間層が厚いっていうか、ちゃんとやっている人が結構多くいて、それぞれ個性的なんで票が割れているなという印象はあります。そしたら2票以上で5位までの議論をさせていただけたらなというふうに思います。

では、まず2票のものを見ていくと、亀井さんが2票入っておりまして、次に西尾くんですね。先に西尾くんの方から行こうかな。松本先生、河端先生お願いします。松本先生。

松本 色々と闊学的な提案が多くて、構造の人間がコメントしづらいところも正直あるのですが、街だとか地域の魅力を考える上で重要なエレメントをどうしよう、情報を認識できるように両方を繋ごうという提案が多い中で、私は街の魅力だとか土地に対する愛着だとか、それがどんなところから生まれてくるのだろうか、それを掘り下げて考えてくれた提案に票を入れようと思いました。そうすると西尾くんともう1票河野さんに入れているのですが、その辺の人間の心理に与える普遍的な部分を考えてくれたなということで私は評価しています。

藤原 なるほど、ありがとうございます。河端先生どうでしょう。

河端 河端です。誰に入れようか非常に今回迷

いました。他にも4人くらい書いては消してという人が。結果的には西尾くんに1票入れたんですけど、模型の方でも図面の方でも、緻密にどういう効果が出来上がっていくかと非常に感じさせてくれる完成度の高い内容だなということで入れました。特に段々と傾斜地というか密集したところから、段々空き家が増えていくような中で、いかにそのエリアの魅力を高められるかというところで庭を繋いでいくという。要約するとよくある考え方なのかもしれませんが、そこを非常によく練って考えているなということで西尾くんに入れました。

藤原 ありがとうございます。西尾くんの提案は街づくりで崖を寄り合い地にするっていうアイデアだったのに、構造計画のお二人に推されるとは中々西尾くんの計画の確かさを感じる。すごいなっていう。西尾くんやるなと思いますね。次、亀井さんを推している大野先生お願いします。

大野 今回の発表で、かなり地域を再生するっていうのが多かったと思うのですが、その中で小さな温泉宿を何とかしようという気持ちが一つ一つの仕掛けに丁寧に考えられていたというのが非常に良かったと思いました。残念ながら質問したときに他の湯治場を調べていないのが非常に残念だったんですけど、いくつか見るとヒントになるところが多いと思いますし、新しい試みをやっている公共銭湯みたいなものがあるので、是非他のを見てブラッシュアップしてほしいと思います。でも非常に良

かったということで素直に票を入れました。

藤原 高見沢先生。

高見沢 ダントツに良かったんですけど、今回コロナなということで設計する人たちはみんな苦労したと思います。特に地方の分析をちゃんとやって提案するのは中々大変だったと思うのですが、野沢の温泉ということで、どれくらいリサーチされたかわかりませんが、非常にしっかりとした提案だというふうに思います。特に3つの切り口というか、塔を立てたのもそうでしたし、単に温泉に観光に行くということだけではなくて、地域のコミュニティの再生を、単に地域の中で閉じた再生ではなくて外の人も呼び込みながら再生したり、あるいは多分あの中には、雇用ということで地域再生のいろんな要素が入っていますので、本人があんまりその辺は特に言ってなかったかもしれませんが、さらにその辺のところを言葉に出して、あるいは表現をしたら、地域再生に本当に役に立つ内容だと思いますので、とても高く推させていただきます。

藤原 ありがとうございます。今年は4年前期がコロナだったので自分の実家か近所って話だったんですけど、亀井さんは野沢温泉をあえて選び、1年間かけて探っていったので相当いろんなことは調べた分、厚いプロジェクトだというふうに思っています。ありがとうございます。

以上が2票になりますが、もう一回2票も

△石川泰成『都市に残る地形と運動の建築』p.200



△正林泰誠『漁村の道で育つ』p.92



△馬場一輝『歴史を肯定し、多様性の中で江の島を更新する』p.76



△阿部はなみ『歩行そのものが居場所になる』p.88



△西尾昂紀『庭がつくる街』p.28



△亀井美里『お湯暮らし』p.12



含めて最後の方で選ぶことになるのか、もうちょっと絞って選ぶのか後で議論させてもらえればと思います。次に3票の方に移らせていただきたいと思いますが、3票入っているのは上田くんと藤澤くん、木幡くん、寺西さんの4人ですね。それでは寺西さんから行こうか。寺西さんを推している守田先生から。

守田 大野先生、高見沢先生も言われている通り、地域再生のプロジェクトが多くて、その中でも特に古い街の伝統だったり歴史だったりを大事にしながら今後を考えていこうといういくつかのプロジェクトで、歴史をやっている人間としてはかなり難しい課題に正面から取り組んでくれて、その点をすごい嬉しいなと思いつつ、実際に自分がその要素を取りながら残していくのは提案しやすいんですけど、何か新しいものを自分で作りながら、そこの街の文化を残して新しい空間にしていくのは、やっぱり難しいですよ。口で言ってもどのようにやっていけばいいのかっていうのは難しい課題だったと思います。模型表現の仕方が良いか悪いかはわからないんですけど、あの銅板葺、たしかにパツと見たらギョッとしちゃうのだけど、一言寺西さんが最後に自分で言った言葉で、あの銅板葺が時間の経過が経つと共に、緑青で緑になってきて、それがまた地域の文化、歴史、時間を作って街と融和しながら、新しく自分が作ったものでも、そこの歴史、時間を考えながら設計しているその言葉が印象に残ったので、是非1票を推したいないうところで入れました。難しい課題によく取り組んだかなと思います。ありがとうございます。

藤原 ありがとうございます。次、江口先生。

江口 江口です。寺西さんが良かったのは、記憶を形にするっていうアプローチが結構驚きで、そういう言い方あったかっていう。僕は建築建てる必要ないんじゃないかっていうスタンスで研究しているんですけど、こういうこと言われちゃったらいくらでも建築作れるなと思ってやられたと思いながら、でも、すごく当たり前のようなんだけど改めて言葉にされるとハツとする、すごい新鮮な驚きがあって。しかも緑青がそうだけど、一つ一つのデザインに明確なわかりやすい理由があったので、それが良かったなと思いました。でも多分もっとできたんじゃないかなというのはありますけど、1票入れました。

藤原 次、百田さんお願いします。

百田 卒業設計って形とか空間を作るものと経験を作っていくっていうような大きな性格があると思うんですけど、これは街の構造からみん

なが共有する街の経験みたいなものをテーマにしているのかなと思って、僕も神戸出身なのでこの地域の特徴とかってわかるんですが、海と山が本当に近接していて、海から邸宅地に上がっていくときに門があって路地みたいな所を通して、自分の家に入って邸宅からもう一回海に出会うというか、そういうのってこの街が持っているもので、どうやってもう一回海が見えるのかっていうことで街全体を共有しているようなそういうことにつながるかもしれない、それが戸建て住宅は中々感じられなくて、たまたまその洋館がそういう経験ができるものとして残っている。それをつなげていって、街全体の魅力を継承していくっていうのはあるのかなというふうに思って評価をしました。

藤原 ありがとうございます。次は上田くんを推して下さっている大原先生お願いします。

大原 はい。上田くん実は経過点がないっていうとあれなのですが、悩んでいることは大分知っていたもので、かなり頑張ったないうところが私の場合少し入っています。卒業設計は皆さん、場所の選び方が重要だと思うのですが、かなり難しいところを選んだなと。その中でやはり、核になる全体を一体感を持たせるためにどうしたらいいかということで色々悩んだ末にああいう結果を作ったかないうところですよ。それに、提出されたものに関しても比較的、図面なんかちゃんと描けていた方だと思って、特に交差点のところのチマチマしたものなんていうのは、平面図をよく見ると面白かったなと思っています。ということで、よく作業をしたという結果として今日発表されたということです。ついでだから言っちゃいますけど、その過程で色々考えていた川べりの景観とかですね、そういうようなことがほとんど捨てられちゃったところが残念だったのと、「自治概念」という言葉が少しわかりにくかったないうのがありますが、優秀作だと思って推しました。

藤原 ありがとうございます。藤岡先生お願いします。

藤岡 はい。私はシンプルに良かったと思います。自治活動ということで中州って10年く

らいずっと周辺が押されて地盤沈下している所で、そういったエリアでの自治、特に経済活動を含む自治ですよ。大きな資本ではない意味での経済活動を含む自治ってということで、割と1番難しいテーマにチャレンジしていたんじゃないかと思いますが、それなりにまとまっていたと思います。図面もよく描けていたと思います。特に中洲の中で、表の経済もあるし、風俗街の裏の経済もあるし、そういったものを包括しながら、先程のような自治を支えるっていうのはストーリーとしてもうまくまとまっていたと思います。ただ、もうちょっと内容としては荷捌きとか、そういう提案だけじゃなくて、子ども食堂だったり、近くに実は実際に24時間の託児所なんかもあったりするんですけど、そういう福利厚生って言ったらいいのかな、なんかそういったところもちゃんと相手にして考えていくと、もっと説得力が出たかなと思いました。以上です。

藤原 ありがとうございます。次、野沢さんお願いします。

野沢 僕も今、お二人が指摘されたことと、あとプレゼンテーションがきちんとしていたなということと、中州って僕ちょっと好きなものですよ。九州でプロポーザルがあったときに友人人数人と取ったときにですね、中洲の河庄で盛大な宴会をしたことなんかを思い出して、良い所だなと思って、評価高いんです。やっぱりちょうどいい大きさの島っていうか、なんか自立エリアみたいな感じがあるんでしょうね、あそこはね。だから場所の選択もすごく的確だったし、真ん中のスパイン（編集者注：脊柱）をああいうかっこでずっといじるんだっていうことと商人の自治みたいなことって成熟した都市の、京都とか博多とかああいうところの、もう一回振り返っても良い自治組織みたいな感じですかね。そういうものに気概とか、あるいはコミュニティの本当の力みたいなものを見たんだよっていう、そういうオマージュかもしれないと思って、いいなと思いました。

藤原 ありがとうございます。たしかに、寺西さんも上田くんもなんていうか、堂々たる都市



の記憶というか、そういうのを使って、それを形にしようということでは、どちらもたしかに票を3票集めるだけある力作だなという感じがします。

次、3票を集めているのは藤澤くんですね。藤澤くんに票を入れてくださったのは、江口先生と富永先生と安田先生ということで、安田先生からお願いします。

安田 斜面地の計画が非常に多かったですね。僕が藤澤くんをいいなと思ったのは、高校と幼稚園の、割と大きな面積を必要とするものを斜面地に上手くまとめていたないうところが良いと思いました。また、斜面地をうまく利用して、普段普通の学校建築とかでは体験できないようなニュースペースを生み出していて、そういうので選びました。あともう一つは図面表現が非常にしっかりしていたなという印象です。以上です。

藤原 ありがとうございます。次、富永先生お願いします。

富永 似ているんですが、やっぱり一つは思考の密度が図面から感じられていて、考えているものの深さっていうか、部分部分をずっと見ていて、ある種の表現の一貫性もあるし、建築的な知性も感じるプレゼンテーションだったと思います。それに丘陵地という地形のある部分に手を入れたら自分の住む街が変わってきて、自分の住む場所の延長のように感じられるという、そういうようなものの表現、仰っていたことが非常に僕はいいなと思いましたね。ただ残



念なのは、この題名の“坂を登り出したら我が家”っていう、“坂を登り出したら”っていうアングルの図がいくつかあったんだけど、そういうようなものをプレゼンに、題名がそうなっているんだから、載せればもっと素晴らしくて、ちょっとエレガントすぎちゃって、控えめだからあまり伝わらなかったんじゃないかって気がするんだけど、良いデザインだったと思います。

藤原 ありがとうございます。次、江口先生お願いします。

江口 はい。僕は普通の建物が好きで、工務店とか住宅メーカーのが好きで、それで研究者をやっているんですけど、とはいえ戸建て住宅地をどうしようっていうのは、社会的な問題ですよ。人口が減って、空き家が増えて。そんな中で希望の光が見えたというか。連想されたのがオックスフォードみたいな、街の中に大学があって、大学の建物に行ったつもりだったんだけど、誰かの家に入っちゃったみたいなのが実際行ったときにあって、そういうのが連想されて、ありかなと思ったんですね。この建築に見立てるような言い方があったと思うんですけど、見立てる想像力が衝撃であって、説得力がある感じがしたのは良かったなと思いました。

藤原 ありがとうございます。次、木幡くん。木幡くんを推したのは、尹先生と大西さんと百田さんですね。尹先生お願いします。

尹 今年も力作が多くて悩ましかったですけども、特に立体通りみたいな提案が結構あった

なと思いました。グランドレベル以外のレベルで繋ぐっていうのは、一つ提案として面白いし、可能性もすごくあると思うんですけど、そこで重要なのは、グランドレベルとの関係っていうものがすごく重要だなと思うんですね。ですから、繋ぐことが目的になると問題は解決するんですけど、そこでの魅力はどう表現するのかっていうのは、すごく悩ましいと思ったんですが、秋葉原でのその雑居性というものをちゃんと注目しながら、看板も含めて、いろんな要素も含めて、それも評価しつつ空間化したのはすごく面白かったですし、それを大規模開発と対比しなかったのは評価できるなと。今の状況で秋葉原の魅力を活かしつつ、その魅力が続けられるような提案っていうか、その次になんかありそうな、夢があった提案だったと評価します。

藤原 ありがとうございます。では大西さんお願いします。

大西 はい。私もどれも甲乙付け難かったんですけど、この秋葉原の計画は模型がすごく面白かったなというふうに思って、何かその立体路地を作って、中で色々繋がって面白くなっていくってことが、外に看板として道に出てきて、実は中で繋がって面白くなっていることが、通りを面白くしている。ネガとポジと両方面面白くなっているっていうことが、模型を見たらわかるのが良かったなと思ひまして、やっぱり建築そのものだけじゃなくて、街も面白くなることを言いたいんだけど、中々道を覗いてみるとそうはなっていないプロジェクトって結構あって。この場合は道も覗いてみるとそれも面白くなっているのがすごくいいなと思いました。

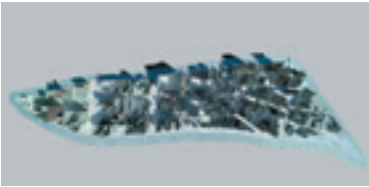
藤原 ありがとうございます。百田さんお願いします。

百田 はい。模型もすごく魅力的だったんですけども、考えがあるっていうか、空間を作る前の、その秋葉原に対する分析っていうか、考え

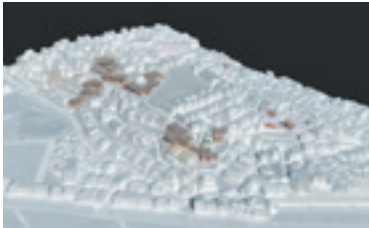
△寺西通夏『まちの文化と記憶を紡ぐ庭園』p.20



△上田成夢『中洲』p.26



△藤澤太朗『坂を登りだしたら我が家』p.38



△木幡耀『秋葉原立体電気街』p.184





がしっかりしているなというふうに思っ、その雑居ビルっていうことが、雑居ビルの共用部は都市の一部であるっていう、まあ言われてみたら当たり前なんですけど、それ雑居ビルじゃないとあり得ないっていうか、オーナービルー社のビルだったらエントランスの所で街の一部とは切れてしまうような、そういうところから、縦動線は街の一部なんじゃないかと。または、そういう雑居ビルの粒も空中に通りが一本通るだけで、小さな粒は入り込めるのではないかっていうような路面ができと粒が小さくなる。その二つのことを考えたら、それをしっかり持って最後空間にしたのはすごいなあっていう。それが、街が新陳代謝していくときにいろんなスケールの粒が交換可能なので、大きな巨大開発に対して対案を提示しているように僕は感じました。

藤原 なるほど、ありがとうございます。藤澤くんも木幡くんも前期から継続のプロジェクトというか、研究テーマで着々と中間でもいろんなことをしっかりやってきて、それで分厚い作品にどちらもなっているなぁというふうに思います。ありがとうございます。

次に4票以上のものにいきたいと思います。4票は上山（源）くん1人ですね。上山くんに票を入れてくださっているのは大原先生、妹島さん、安田先生、霜田先生ですね。大原先生お願いします。

大原 今年皆さん特にそれぞれの地域への想いが強いので、これもその一つだと思いますけど、これに取りかかった理由というかバックボーンのところを聞いているだけで、随分と評価が増してきたというか。逆にいうとそれは、きちんとリサーチしているということだと思っんですね。瀬戸の隣の赤津町ってところの境遇とか、実際にその地域にある様々なデザインの要素のリサーチをきちんとして、その上で作り上げていったということで、大変しっかりとした作り込みで作られているなというのがよく分かりました。非常に丁寧だというふうに思いました。

あと実際の図面というかですね、プレゼンテーションの書き込みなども大変よくできているというのが感心して見ていたところす。あと、プログラムのにも共同で利用するようなものを置いていくような、これも一つのリサーチの成果だと思っんですけれども、本当にそのコミュニティで必要とされているものが何か、的確に抑えているというか、提案まで一貫していた感じがあったというのが、高く評価したところす。

藤原 ありがとうございます。妹島さんどうでしょうか？

妹島 ずっと構成されていくということが示されていた。それでわりと、あのちょっとびったり派手すぎるかなあ、と思うようなところもあったけど、非常にその何か必要なところに足したもので屋根を覆って、新しい風景になりながら、それまでのものも含みこんでいくっていうアプローチ、それからそれが作るどころと、なんかギャラリーみたいに売るところとかっていつて、一部道がないという批判がありましたけど、私は、本当はまあ道があるかもしれないけれど、ああいう感じだと実際少し共存できるような、街にウロウロ人が歩いて、どこが道なのか売場所かわからないような、そういうものが何かできるような気がしたので、それもいいんじゃないかと思っまして、図面もすごい魅力的だったなあ。その辺がすごく推した理由です。

藤原 ありがとうございます。安田先生いかがでしょう？

安田 僕はまず図面から良いなぁと思っんですけど。これはちょっと他の人の案に対する批判にはなるんですが、例えば木造を選択しても、木造をわかっていなくて図面を描いているんじゃないとか、あるいはストラクチャーが例えば、空間に及ぼす影響っていうのをしっかり考えてやっているのかなあっていう、疑問を感じながら見ていて。上山くんのは、スチール、

鉄骨で作って上は鉄骨で屋根をかけたんですけど、その架構の掛け方、構造の選び方、それが非常にうまくパスというか絵に表現されていて、それが空間の質っていうのが、構造が及ぼす役割として非常にうまく表現されていて、それがやっぱりいいなと思っました。以上です。

藤原 霜田先生お願いします。

霜田 はい、私も前の方と同じようにですね、まず図面表現に感動しました、結構。今日ナンバーワンじゃないですかね。あと発表ですね。プレゼンテーションの姿勢も非常に誠実ですし、きちんと受け答えができていたっていうのもいいなぁと思っました。また、タイトルに込められた、街の固有の閉鎖性と開放性の境界を設計するっていうのも、その境界が建築になっているんですよ。その展開も面白いなぁと思っました。建築スケールの中でも、境界があるのと、街の中に新たな建築が点在することによって、街の中にある種の領域のようなものを作り出すと思っんですよ。それが新たな地域性のようなものを獲得してるんじゃないか、獲得しそうなんじゃないかなあ、という期待をすごく感じた優れた作品だと思っます。以上です。

藤原 確かに上山君は、なんていうんですか、卒業設計をやっている人の中で、抜きん出てプロフェッショナルっていうか、2回目のスターディーの段階からちょっと違うっていう感じのものを持ってきていたし、今日も素晴らしいことを言っていたなという感じがしますけど、

思ったより集まっていないという印象です。本当に評価軸が多様っていうか、そういう印象を持ちましたけど、本当にもうみんな真似してほしいっていうくらい、きちっとしているっていうか、素晴らしいなぁと思っましたね。リサーチもいい加減じゃないっていうか、その瀬戸なんですけど、瀬戸の中の赤津焼っていう、その中における陶芸の多様なキャラクターをしっかりとつかんでいて、それにふさわしい提案に建築計画の中でも、彼の中でも思考が続いていったのかなっていうふうに見ています。ありがとうございます。

では次5票入っている宮本くん、宮本くんを推して下さっている野原先生、松本先生、西沢さん、南さん、高橋さん。じゃあ野原先生お願いします。

野原 はい、本当に成績が一番良いのは宮本くんかと思っていたんですけど、宮本くんのこの広島、この敷地は発表のときも言いましたけど、非常に旧広島市民球場の、広島の再生にとってすごく期待されている1番重要なおへそみたいなところで、多分あの建築家の先生方でも、ここでコンペが出たら、みんなこぞって出さるうっていうような、すごい重要な敷地に対して、あの提案をしていて、それでも実際にできてもおかしくないような、精度の高い設計ができていたのかなぁと思っます。その上で、さらに川沿いの風景の取り込み方とか、アンデューレーション（編集者注：地形のうねり）の使い方とか、ともかく道とか他のところとか、もうちょっとうまく取り込みながらできるかなとも思ったん

ですけど、そういう意味では、本当にこれから広島再生に期待できる提案をしてくれたんじゃないかなと思って票を入れました、以上です。

藤原 ありがとうございます。西沢さんどうでしょう。

西沢 僕は、本当は建築的には満足していないというか、そんなに高く評価していないですね。単純すぎるというか、大きさに合った力強さが十分じゃないと思ったんです。中間講評の頃からの展開を見ていて、この人は、広島っていう場所の、歴史の重要さっていうのを理解している。その上でやっている、というのが他の誰よりも感じた。あとまあ土壇場で拡大したからちょっとなんかでかくなっちゃったって言ったけど、その割には色々頑張っている。横浜国大ではコンテキストってすごく重要で、そのコンテキストに見合ったものにするのに、建物分散するんですよ。それをone lessっていうか、1つのものにまとめるのはなかなかみんなにとって難しいということなんだけど、宮本くんも分散したり何なりっていうのを経ながら最終的に1個になったっていうその流れが、やっぱり僕としては、評価する。

藤原 ありがとうございます。河端先生お願いします。

河端 私は、単純に、あの円形の大屋根の中にある空間が、非常に抜きん出ていたというふうに感じました。それは非常に強かったっていうのと、この提案が公文書館っていうの、（一般的にイメージされる）公文書館っていうことなのかなと思ったんですけど、どうもそうではない。それで、レジュメを読めると、いろいろやっぱり広島原爆とか過去に対しての強烈な、広島を背負っている部分と、そこから解放してあげたいっていう想い、まあまだ完全な形では昇華されていないのかなあとも思っ反面、あの場所にあんだけの大きなものができる

ことによって、そこが結構変わっていく、非常にそういうものを感じました。

藤原 ありがとうございます。南さんお願いします。

南 僕も途中経過を知っているんで、それも含めてにはなるんですけども、最初彼は地域全体あのエリアを含めて、広島歴史を受け継いで今何ができるかということを考えて、それで全体的に配置していくやり方を（していて）、そのときは別段面白いとは思っていなかったんですが、西沢さんがおっしゃったように、円にして僕に一回見せてきたときに、本当に、年明け後に、悩んでいますっていうことで。ただ持ってきたときに、もうこの建築一個でこのエリアをつなぎたいっていう意識が強くて、それでこういうエスキスをしたのを覚えているんですが、シンプルで突き詰められてはいないかもしれないんですけど、あの模型とプレゼンテーションを見たときに、ああ一個の建築でもその地域全体を変えられることができるのかもしれないということを少し感じて、詳細やディテールはあると思いますが、そういう勇気を持った提案、建築の可能性にかけているような、そういう卒業設計だと思って、一票入れました。

高橋 僕も他の方と同じ印象なんですけど、いろいろプレゼンテーションとか、既視感があったという印象を持っている方もいると思っんですけれども、でもそれを差し置いても、宮本くんが他の人と違うなぁと思った点があって、それは多くの人が地域をリサーチして、アクティビティーとかプログラムを拾って、それに屋根をかけるとか形を与えるということで、活動を追いかけたり、活動とセットで建築を提案するんですけど、宮本くんの今回の丸っていうのは、プログラムはどうでもいいと思っんです。図書館だろうがなんだろうが別にどうでも良くて、どっちかっていうと河原の平地のところにでっかい丸いものがあつたら何か起きるんじゃないかっていうところに、期待が全部集

△上山源喜『街区裏でつながる赤津焼きの町』p.100



△宮本皓章『歴史をもにす新たな広島風景』p.104





まっている。設計している本人もそこにかけているっていうことに一番、建築設計する人っていうのはこういうことを考えたほうがいいんじゃないかなっていうのを思ったんですね、それが一番大きいです。

藤原　ありがとうございます。宮本くんも本当に悩みながらよくぞそこまでもっていったという感じで、すごく大きな卒業設計だなというふうに思います。

次 9 票と 10 票ということで、先に 9 票の方からいきませんが榊原さんですね、榊原さんに票を入れてくださったのは菅野先生、西沢さん、私、大西さん、寺田さん、南さん、野沢先生、高橋先生ですね。はい。AD 系の人が多い。じゃあ先に菅野先生。

菅野 はい、私は榊原さんと河野さんに2票入れたんですけど、他にもたくさんいれたい人がいて非常に迷いながら選びました。でも榊原さんに関してはやっぱり同期の人がその地域の地形とか歴史に着目しながらやっている作品ですごい優れたものがたくさんありました。けれども、この鎌倉の地形に対するすごく小さなささやかな、構築物でありながらいろんな可能性が見えてくるなあということと、あんまり歴史っていうことに言及されていたわけでは無いかもしれないけれども、この形ができることによってこれが今2020年なわけですけども、すごく長い時間とか溶け込めるような建築なんじゃないかなあという、そういう長い時間を感じていました。

藤原 はい、ありがとうございます。じゃあ、野沢さんいきましょう。

野沢 多分相当鎌倉の地形をいじるっていうのは難しいことだと思うんですね。それでいてうまくいったら本当に何ていうのかな、すごく大きくなっていくっていうか気分が良いものができるんだろうと思います。思っただけなんですけど、僕だったら少しありますけど、それでも

としても鎌倉らしい手法っていうのかな、それ
 から建築ってある問題があったときにその問題
 が緩やかに片がついていくっていうのが建築の
 1つの仕事かもしれないんだけど、なんかやっ
 ぱ彼女のなんていうんですかね、建築に対する
 姿勢みたいなものに非常に好感を持ってしまっ
 たといいますか、そんなことで票を入らせて
 いただきました。

藤原　ありがとうございます。高橋さんお願いします。

高橋 これ僕も宮本くんと同じ印象で、場所を
経験するっていうこと、自分が提案したものが
実際に経験するとどんなふうに感じられるの
かっていうのが、割と感覚的に素直に形になっ
ていたのかなぁと思いますね。谷戸って奥の方
まで行ってここで行き止まりだなーって思うん
だけど、実はその更に奥に行けて、終いには山
道を歩いていくと別の街の奥にワープするって
いうこういうことが起きている。これは大きな
提案だと思うし、それを建築の力で実現しよう
としたということがすごくよかったんじゃない
かなと思います。ただ講習会のときにも申し上げ
たそのプログラムの問題というのが必要な
かったかと思います。

藤原 はい。寺田さんお願いします。

寺田 はい。私も実は自分の祖父母が鎌倉に住んでいたということとか思いがあって、鎌倉の地形とか細い道とかいろんなことを考えながらこのプロジェクトを拝見していました。で、やはり榊原さんが自身の体験をもってこの切り通してものをどう考えるか。それがどういう経験になっていくのかというのが、彼女の考えがスツと模型を見たときにこれからの鎌倉にあり得るんじゃないかなというのが非常にわかりやすかったということと、住民の立場になって、鎌倉観光客が多く、住民のためになってない割と駅から近いところっていうのと、住民がどうコミュニティを作るためのきっかけを与えるの

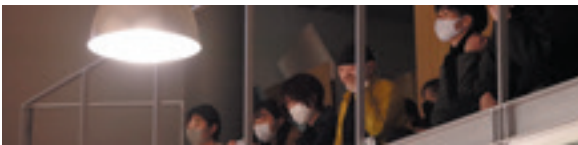
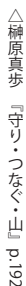
かっていうのに対して、素敵な素晴らしいアイディアと建築的にも非常に美しいものであったんじゃないかなあと思って票を入れました。

藤原 大西さん。

大西 そうですね、あの提案を見ているというんな想像が膨らんでくるといとか、何か例えば、本来つながってないところがつながる面白さっていうものはどんな建築に転化できるんだろうってようなことを、みんなが考えたいなる提案であることがまず面白い。で、私はその建築が何か山に掘り込まれているみたいなのが面白いなあと、なんていうか屋根は確かに出ていたけど、一番右側のほうに書いてあった全体図みたい、立面図みたいなものがなにか山に造岩されるみたいに道があるっていうのが、すごいプリミティブな、道なのかな建築なのかわからないみたい、そういう感じで掘り込まれているのが、新しいなあと感じて、いいなと思いました。

藤原 はい、乾さん。

乾 まず純粋にですね、形が面白いなって思った。で、個人的にはちょっと建築にしすぎていうか、もっと掘り込んだやつにちょっと屋根がかかるとか、なんかそのくらいのバランス感の方がいいんじゃないかなあと思ったんですけど、でその、形が面白いっていうのはまあ単に面白いっていうわけじゃなくて、その歴史に立ち向かっているようなところがあって、今まで



その切り通しっていう直接ズバって抜いた、飛んでるみたいなものがあの地域にいくつかある中で、新しいタイプの切り通しを作るっていうのは結構責任の重いデザインだと思うんですね。だけど、何かそれに対して、ちゃんと答えているというか、なんかこういうのって単にっつなぐだけじゃないというか、つなぎながら何かいろいろな中でいろいろなことが起こるっていう、なんとなく現代に求められる切り通しってこういうことなんじゃないかっていうことに対して、ちゃんと形で答えようとして、それにわりと成功しているのかなあって思って。なかなかそうやって形で成功するっていうところまでいけることってやはり卒制で少ないので、それができているのは評価せざるを得ない、って感じで点数を入れました。

藤原 ありがとうございます。西沢さんお願いします。

西沢 榊原さんののは、建築的にはそんなにすく（上手く）いってるとは思わないんですけど、でもすくくそれでもいいなと思ったのが、自分の想いが建築になってる。なんかやつぱり、みんないろんな想いがあってやるんだけど、形に置き換えたときにぎよっとするようなものになったり、何か想いが汲み取れないものがあったりってことがあるんだけど、榊原さんののはエスキスを一緒にやってなくても、最終的なものを見てその想いがこういう形になったんだ、というのがすごいすんなり読み取れる。僕はあのこは良くない、そこが良くないとかい

いろいろ言ってもですね、これがいいな、それが1つある。

あとさっきの宮本くんにすごく近い、共通しているところがあるなって言ったのも歴史を考えている。それがあってその歴史の上にこれがきていいんだという感覚があるなあと。それがやっぱり、あのプロセスを見ていて言っちゃ悪いんですけどいくつか出して全部失敗していたような気がするんですね。でも、最後のこれはいいんじゃないかな、と思いました。

藤原 南さんどうですか？

南 神原さんの建築は切り通しを、歴史を調べてその結果ああいいう形になったんですけど、良いなあと思ったのは、それが今までにあった切り通しではないものを作ったっていうのが、現代ならばこういうことができるんじゃないかと。で、さっきの宮本くんもそうなんですが、評価したいなと思ったものは問題解決をして、だから成功。解決をしたから成功です。というものではなくて、切り通しをして反対側と繋いで、便利だったり、災害を防ぐようないろいろあると思うんですけど、僕の印象ですが、彼女は山があって分断されているときに、そこをつなぐという、山を歩いて登って体験してその中にいろんな機能があったときに、現代だったらこういう楽しみ方ができるんじゃないか、山というものはこれだけ地域にとって豊かなのではないかっていう、そういう想像をかきたてるような、作った建築も昔では縦に掘るけど今だったら横に掘ってそれが建築と道同時に作れるんじゃないかという空間の提案まで含めて凄く創造的な卒業設計だなぁと思っていました。

藤原 私も入れているのでちょっとコメントすると。谷戸とか山とか掘るとか洞窟っていうのをテーマにする人は今までも数多くいたんですけど、今までにない独特の視点で空間性を見ているなあという、まずその新鮮さに驚きました。そのドローイングを見たときに洞窟をちょっと掘っただけなのにそこに空間が現れて道にな

るっていう、すごく新しいことを考えているのかもなぁと思ったのと、あと今回の中で、一番敷地の選び方とかテーマの選び方が深いついていうか、表面的な社会課題じゃないなんかもっと大きな時間軸を捉えようとしているような気がして、中間とかでもいろんな議論があったんですけど、彼女なりに議論を深めていって、最後に我々のエスキスの想像を超えたものが出てきたっていうのにいろんな意味で驚いて、これは素晴らしい卒業設計だなと思いました。まあでもかなり多くの人に反応してもらって彼女なりに勇気を出したかいがあったなというふうに思います。ありがとうございます。

最後 10 票を集めた河野さん。これはかなり
いろんな専門性を持った方々から幅広く推され
ている感じです。藤岡先生いかがでしょうか？

藤岡 はい。自分の街、自分の住んでいる街を取り上げているってことで、すごくプレゼンテーションも、説得力とか伝わってくるものがありましたし、何より知っているところだから、内側からプログラムを考えられているっていうのが良かったと思います。で、レジュメとか見ても参考文献とか見ても、すごく時間軸に興味を持っているんだなあとというふうに思いましたし、緩やかに町が変化していくっていうそういう時間軸上の建築のあり方を考えようとしているんだなというところにも好感が持てました。ちょっとその提案が少し平面的かなあっているのも若干物足りなさとしてはあって、平面に着目していたと思うんですが、もう一方で坂とかそういうテーマは住宅地の問題としてはあって、塀を開いたときに坂がどのようにして街の中に現れてくるかっていうのを、そういうのをもう少し身体スケールで発見できると、それぞれ家と道とか、家と道の有機的なあり方とか、もう少し相互に街が家に入り込む、家が街に染み出すとか、もうちょっと立体的に考えられたのかなあというのがありましたけれども、でも、最初述べたように内側から考えられているというそういうところがよかったのかなと思います。以上です。





藤原 ありがとうございます。守田先生どうでしょうか？

守田 はい。まず図面表現とかも非常に丁寧で評価できるなと思ったんですけども、一番評価できたのは袋小路っていうのに着目した点かなと思いました。で、こうした均等な郊外住宅地の再生とかでコミュニティが復活とか強化とかが重要だ、という場所でみんないろんなアプローチをしたりプログラムの中で自由に入れる空間を作りましていうのをよくやると思うんだけど、それって実際どうなの？本当にみんなが入れる空間になるの？って、誰でもって言っちゃうと逆に誰も使わないって言える問題って、みんな気づいて分かってはいるはずなんだけどつい使っちゃってると思うんだよね。それをここで河野さんは袋小路に一番関連する人たちのなかでまずは考えていくっていう。そうすると集まる人使う人っていうのはリアルに想像できて、そこから広がっていくっていうことが、可能性があるんだなあっていう、本当に無目的っていう無責任に誰でもって言ってないあたりが非常に今後もうこういった場所の再生のあり方として良い一歩になるのかなあ、手段の1つになるのかなあって一番評価しました。

藤原 ありがとうございます。菅野先生どうぞ。

菅野 私はたくさんいいところがある作品だなあと思いました。まず、前例として、卒業設計に取り組むに値する、なんていうかこの街の大きな問題に取り組んでいるということと、どこにでもあるすごく凡庸でたくさんの住宅が建っている住宅街。これからどうするんだろうという問題に対して取り組んでいるのがよかったのですが、それに加えて一票入れた理由として、つくった建物の形とそれがおかれた場所の選び方がよかったと思うんですが、つくった建築によって、それが開かれることによって、周りの風景の閉じられていた建物が透き通って見えてくるような、つくったものだけでなく、つ

くってない風景が変わってきて見えるような気がしたんですよ。それってすごいなあと思って、それは私の気のせいかもしれないけど、おそらくきちんとその場所をリサーチして、適切な場所に適切な形をつくったことによる、周りの閉じられた凡庸に見えていた風景がちょっと開放的に見えて、そこを訪れた人にその家々に対して愛着を持たせるような建物じゃないかと思って入れました。

藤原 ありがとうございます。次、野原先生お願いします。

野原 まずあの…タイトルにキュンとしまして。「いつまでもこの街は私の実家」これはご時世ではあると思うんですけど、自分の地域を見直しながら、そこから何かを見出そうとしているこのタイトルに強く惹かれたということ、今年度都市科学部1期生だと思うんですけど、私フィールドワーク論っていう授業やっていまして、覚えているかわからないんですけど、コンテキストの読み方がみんなすごく上手になってきていると思うんですけど、一方でそれを次の設計に生かしていくというのがもう一段難しいというか、大変な中で、河野さんは袋小路とあのポイントの場所っていうのが自分の提案としてうまくコンテキストを導き出して、しかもそういう住宅地で導き出すのは難しいと思うんですけど、ちゃんと見た上で提案しているのがいいなあと思いました。発表ではリノベの方がよかったんじゃないかとかあったと思うんですけど、それは多分空き家になる前に独居になる家とかたくさんあって、そういう家と噛み合わせながらやっていく提案になったら本当にこういう街で挿入できる提案になるかなと思います。まだまだできることはあるなと思ったんですけど、非常に魅力的な提案ではないかなと思いました。

藤原 ありがとうございます。次、尹先生お願いします。

尹 はい、そうですね。私もあの…袋小路、袋小路と強調していて、袋小路の問題として奥側の空き家とかを活用するのかなと思ったんですけど、そうではなくて街の主要な道路から袋小路の入り口に設計したというのが、ただの問題を解決するよりも、それを踏まえてその次の街を考えているのが評価できるなと思いました。それがその地域のコミュニティにも触れていたと思うんですが、ある種の地域の単位というか居住単位というか、何らかの単位というものを示すような建築を提案していたので、身近な地域だから見えてきたことがあると思うんですけど、ちゃんとその地域、郊外住宅というものが人口減少の問題として問題化していて、いろんな研究をなさっていると思うんですけど、それをふまえて郊外住宅地が魅力あるものとして示してくれたのが評価しました。以上です。

藤原 ありがとうございます。松本先生お願いします。

松本 さっきフライングで言ってしまったんですけど。大抵の人は、実家には愛着を持っているんですけど、街に愛着を持っているとは限らない。何の違和感があるのだろう。そこに思いを巡らせてくれた提案なのではないじゃないかと思いました。

藤原 ありがとうございます。富永さんお願いします。

富永 つくっている人が強く信じている。これがいいいだって強く信じて、信念を持ってやっている感じがある。レジュメを見ると素晴らしいレジュメなんだよね。話もうまいし、確信に満ちている。形は控えめなところもあるかもしれないけれど、すごく明るい提案で、多分すぐこうなると思いますよ。福祉の住宅とか、そういうものは空き家を利用してコミュニティの場にするとか、そういうふうになってく、すごく信念を持った明るい提案なんで、まだこれ伸び代もあるし、いいなあと思いました。

藤原 ありがとうございます。寺田さん、お願いします。

寺田 みなさんがおっしゃっていること、納得することで、付け加えるなら、河野さん自身が更新のリズムっていうものを見ながら袋小路に着目し、自分自身の問題として先まで考えているっていうところが素晴らしいのと、やはりリアリティがある。もう少し提案そのものは、やりようはあるんじゃないかなとは思いますが、自分の思いから発してそれが形になって、街自体もリズムがあるようなことで可能性があるんじゃないかなと思います。あとは、住民が管理して共有物として使っていくとか、何かルールのなことも考えているというのも評価の対象でした。

藤原 ありがとうございます。乾さんお願いします。

乾 河野さんのやつは、こうした問題は少しずつしか進まないことだったり、時間の問題を考えないと成り立たないという、すごいリアルなことに対して答えようとしていたり、あるいはその塀とか非常に些細なものが風景場所を決定づけていることをリアリティを持ってやっていたり、なんかこう、かなりリアリティをもってあの場所を変えていくにはどうすればいいか結構真剣に考えている。だからといって、すごく真面目な提案なんだけど、リアリティを追求していくことが結構がエティックになっていく、詩的な解決に至っていくような、なんかすごい、なんでしょね、単にまちづくりの手法論としてうまいっていう問題もあるんだけど、同時に明るい、ただ明るいだけでなく希望を感じたりとか、詩的な風景になっていくんじゃないかっていう期待感があって、まちづくりを建築的に考えていく上で、可能性をすごく感じてしまったっていう提案でした。もちろん一個の作品は荒っぽいところもあるんだけど、もっと詰めてほしいという気持ちもあるんだけど、なんかスケールがよかったのか、場所がよかったのか、何がうまくいっているのか私はまだうまく解釈できてないんですけど、なんかすごくうまくいっているなっていうようなことで一票入れました。

藤原 私も入れているので、簡単にいうと、僕はなんか一番あったかくていいなっていう。今年はやっぱり自分の居場所みたいなことを問い続けた一年だったと思うんですけど、そのときにみんなが自分の街を良くしたいと思うんだけど、そういうときにどういう言い方やどういう戦略があるのかって戦略的に考えるんだけど、河野さんはそうじゃくて、実家って言う。街を

実家って考えるっていう瓢箪から駒っていうかそういう言い方あったかっていう、僕も何回か引越したことあるのでわかるんですけど、引越しちゃうと自分の街じゃなくなっていくっていうか、戻る場所がないっていう感じが日本の都市の弱点っていうか、みんなが長いこと住まないの、帰る人がいない、帰る場所がないっていう、そういうことなのかなってすごく端的に日本の都市の問題点を誰もがわかる形でメッセージに込めたっていうのは素晴らしい能力だなって思って。プロジェクトとして、建築計画としては色々問題っていうか、建築計画になってないという意味では卒業設計として推せるかどうかわかんないんですけど、メッセージとしてはすごくいいぞっていうのは思ったということで票を入れました。以上ですね。全員のコメントいただきました。ありがとうございます。時間なので、吉原賞を決めたいと思います。

南 5人選ぶことになるんですが、5位の人が4名います。吉原賞の1位を河野さんと榎原さんが群を抜いて票数が上なので。

藤原 結構差があるので、決戦投票で決めるのが順当かなと思います。あとはこの4人が上位4人だとすると、5位までにあと1枠しか残ってないので、5位を決める投票もしたいと思うんですけども。1位と5位までが重要なので、3票の人が4人いるので、4人の中から5位を1人という形でよろしいですかね。

藤原 はい、結果が出ました。今年度の吉原賞は、河野さんに決まりました。おめでとうございます。

(拍手)

藤原 5番目に入ったのは木幡くんです。おめでとうございます。

(拍手)

藤原 2番目に票が集まったのは榎原さんです。おめでとうございます。

(拍手)

藤原 3番目は上山（源）くんです。おめでとうございます。

(拍手)

藤原 4番目は宮本くんです。おめでとうございます。

(拍手)

藤原 最後に吉原賞をもらった人からスピーチをしてもらおうと思います。河野さん、お願いします。

河野 ちゃんと実感してないんですけど、本当に？という感じですけど、本当に嬉しく思っています。建築学科に入ったときから些細な疑問であって、郊外住宅地って建築的にはつまらないというか、あまり面白くない場所なんだ…と、そういった疑問を、4年間横国で勉強してきて、卒業設計としてできて、形はまだ自分でも思うようなものではできていないんですけど、こういう形で一つ卒業設計出せてよかったなというふうに思っています。本当にありがとうございます。

藤原 コロナの中で本当に審査員の皆さん、一日ありがとうございます。発表者の皆さんも本当にありがとうございました。例年に勝らぬ力作揃いで、相当大変だったと思うんですけど、15時までしか建築棟使えないという中で皆さん頑張ってくれてありがとうございます。以上で終わりたいと思います。ありがとうございます。

